

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		① 作成日	令和 8 年 4 月 23 日
②法人・団体名	さくら教室		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	沖縄県名護市城 1-4-11 名護市営市場 2 階		
④責任者氏名	神谷 康弘	(役職名等)	副代表
⑤担当者氏名	神谷 久恵	(役職名等)	会計

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-028	⑦助成金額	50 万円	⑧申請カテゴリー	B
⑨奨学活動名	ハイブリッド型学習支援で叶える子どもの自己実現				
⑩主な実施場所名・ 及びその住所	城公民館 名護市城 2-16-19 名護市営市場 2 階 ぽこぽん 名護市城 1-4-11				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

さくら教室では、地域課題を学びの題材とする PBL 型学習を実践し、子どもたちが調査・対話・試作・発信を通じて主体的に学ぶ機会を創出した。

ビール酵母を活用した「琉球黄金もち麺」の商品開発では、資源循環や地域産業とのつながりを学び、収益を活動支援へ還元する仕組みも構築した。

伝統船サバニを通じた文化継承や観光活用の提案、副産物を生かしたクラフト制作にも取り組み、自己肯定感や協働性の向上につながった。

ボランティア（高校生・大学生・一般）を含む延べ参加人数 2186 人を数え、受賞実績も得るなど大きな成果を上げた。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A : 人)	平均時間 (B : 時間)	活動量 (A x B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	197	2	394	
高校生等	330	2	660	
大学生等	579	3	1737	
学習支援員等	554	3	1662	
その他	526	2	1052	
合 計			7242	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：

法人・団体名：さくら教室

作成者 氏名：神谷 康弘

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

本活動では、地域社会の中に存在する課題を、子どもたち自身の学びの題材として捉える PBL 型地域課題解決に取り組んだ。地域の食、文化、環境、産業、観光等をテーマに、子どもたちが「地域にはどのような困りごとがあるのか」「その課題に対して自分たちに何ができるのか」を考え、調査、対話、試作、発信を重ねながら学びを深めた。こうした取り組みにより、受け身の学習ではなく、地域の実情と結びついた主体的・探究的な学びを実現した。

商品開発「黄金もち麺」では、地域の副産物や未利用資源を活用し、新たな価値へと転換する実践を行った。特に「琉球黄金もち麺」は、オリオンビール株式会社の製造工程で排出されるビール酵母を乾燥加工して活用したアップサイクル商品であり、食品ロスや資源循環への意識を高めるとともに、地域産業とのつながりを学ぶ教材となった。また、商品販売を通じて教室活動への寄付が生まれる仕組みが整えられ、学びと支援と地域課題解決が循環するモデルとして展開された。

伝統船サバニ作りでは、沖縄の伝統文化と海洋文化を学びながら、文化継承と地域活性化について考える実践を行った。子どもたちは、サバニの歴史、構造、用途、文化的意義を学ぶだけでなく、地域の大人や学生、企業等と協働しながら、その価値をどのように現代社会の中で生かしていくかを考えた。サバニを単なる伝統文化として保存するのではなく、観光や交流、教育へと接続する発想を持つことにより、地域資源としての可能性を学ぶ機会となった。

また、地域の副産物を活用したクラフトペーパー作りにも取り組み、未利用資源を再評価する環境学習を進めた。廃棄されがちな素材を活用し、新たな製品へと生まれ変わらせる体験を通じて、子どもたちは「不要なもの」の中に価値を見いだす視点を学んだ。さらに、バーチャル空間で遊びながら学ぶ取り組みも行い、デジタル技術を活用した新たな居場所づくりと学びの可能性を探究した。これにより、対面での参加が難しい子どもも含め、多様な参加のあり方を支える実践を進めた。

2. 実施した奨学活動の詳細

本年度の奨学活動では、子どもたちが地域課題を自らの学びとして引き受け、その成果を社会に向けて発信することを重視した。特に、①商品開発「黄金もち麺・黄金素麺」を活用した地域課題解決と食育活動、②伝統船サバニの課題解決、の二つを中心に活動を展開し、その成果は外部表彰という形で高く評価された。

(1) 商品開発「黄金もち麺・黄金素麺」を活用した地域課題解決と食育

本活動は、地域の副産物や未利用資源を活用し、子ども達の実践的な学びと地域課題解決を結びつけることを目的として実施した。商品開発にあたっては、地域資源の調査、活用方法の検討、試作、改良、販売方法の検討、発信内容の整理など、多面的な学習過程を設けた。子ども達は、「地域資源をどのように生かすか」「それを誰に届けどのような価値を伝えるか」という視点を持ちながら取り組みを進めた。

「琉球黄金もち麺」は、オリオンビール株式会社のビール製造過程で生じるビール酵母を乾燥加工して活用したアップサイクル商品であり、環境配慮、地域産業との連携、食育、福祉的支援を一体化した先進的な取り組みである。東京学芸大学、沖縄工業高等専門学校、地域企業等との連携のもとで商品化が進められ、商品購入によってさくら教室の活動支援につながる寄付型モデルが構築された。この仕組みは、消費行動がそのまま地域の子どもの支援につながる構造を生み出し、子どもたちにとっても「学びが社会に役立つ」ことを実感できる機会となった。またサポートしたボランティア学生・地域の皆様の気づきや学びにもなった。

また、本活動は食育の観点からも大きな意義を有していた。地域の食材や食文化への理解、共食の大切さ、食品ロスの削減、地産地消、資源循環といったテーマを、子どもたちは実体験を通じて学んだ。農林水産省においても、こども食堂は食事提供の場にとどまらず、地元食材による調理や共食を通じた地域交流と食育の場として重要な役割を果たすものとされており、さくら教室の取り組みはその理念を具体的に体现するものであった。

その結果、本活動は、第10回食育活動表彰のボランティア部門・食育推進ボランティアの部で農林水産大臣賞（最高賞）を受賞した。これは、地域の副産物を活用した商品開発を通して、食育、地域課題解決、環境配慮、子どもの主体的学び、支援循環の仕組みを高い水準で統合した点が評価されたものである。特に、地域資源の有効活用により社会課題への具体的解決策を提示したこと、子どもたちが学びの受け手ではなく実践の担い手として関わったこと、さらに商品販売を通じて活動支援へ還元する持続可能な仕組みを構築したことが、受賞内容として高く評価された。すなわち、本受賞は、「食べることを学びに変え、学びを地域支援へつなげ、地域課題解決の実践へ高めた取り組み」であることが認められた成果である。

（２）伝統船サバニの課題解決

サバニに関する活動では、沖縄の伝統文化を体験的に学ぶだけでなく、その継承、活用、地域的価値の再認識を通して、地域課題解決型の学びへと発展させた。子どもたちは、サバニの歴史、海との関わり、構造、文化的意義を学びながら、「なぜ継承が難しくなっているのか」「どのようにすれば現代社会の中で生かせるのか」という問いに向き合った。これにより、伝統文化を単なる保存対象として見るのではなく、未来につながる地域資源として再評価する視点が育まれた。

また、サバニプロジェクトは、伝統船サバニを観光資源として活用し、その収益をさくら教室の運営支援に充てることを目指す持続可能な地域還元モデルである。沖縄高専、企業、地域関係者、学生、子どもたちが一体となって進めた本活動は、教育、文化、観光、福祉を横断的につなぐ実践として高い社会的意義を持っている。帆へのドットアート制作等、子どもたち自身が創造的に関わる機会が設けられたことにより、文化継承の当事者としての意識も高まった。

さらに本活動では、サバニを単なる伝統文化体験にとどめず、地域の魅力や課題を分析し、どのように地域活性化へつなげるかという視点を持って取り組んだ。地域文化を観光、交流、教育、福祉へ接続する発想は、地域経済や地域ブランド形成の視点とも結びつくものであり、子どもたちにとっては「文化を守ること」と「地域の未来を考えること」が一体であると学ぶ機会となった。また、これをサポートしたボランティア学生・地域の皆様の学びにもつながった。

その成果として、本活動は、RESAS チャレンジカップ2025において、アイデア賞を受賞した。この受賞は、伝統船サバニという沖縄固有の文化資源を、現代の地域課題解決へ結びつける独創的な提案として発信した点が評価されたものである。具体的には、サバニを単なる保存対象としてではなく、教育・観光・交流・福祉支援を結びつける地域資源として再構成し、地域の特性を生かした未来志向の実践アイデアとして提案したことが評価された。すなわち、地域文化の継承と子どもたちの学びを両立させながら、地域活性化へつなげる創造的かつ実現可能性のある発想が認められた受賞である。

2025年4月1日～2026年3月31日

毎週水曜日 2時間 オンライン（東京学芸大学）と現場のハイブリッド学習支援 48回

毎週土曜日 2時間 学習支援 38回

屋外体験学習 4回

ボランティアを含む延べ参加人数：2186人

周知方法：LINE・Instagram・HP

ご協力いただいた関係者：オリオンビール株式会社・オリエンタルホテル沖縄リゾート&スパ

富士通株式会社・ヘントナサバニ・大阪シーリング印刷株式会社・前田産業ホテルズ

振興出版社啓林館 他

地域やボランティア活動との連携、学習支援員：

沖縄県スクールソーシャルワーカー、名護市こどもサポーター、名護市役所

東京学芸大学・名城大学・沖縄工業高等専門学校・琉球大学・東京科学大学・国学院の学生及び先生

名護高校関係者・地域のボランティアのみなさま



RESAS チャレンジカップ受賞の様子



ボランティア学生・地域の皆様による黄金麺販売の様子

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本活動を通して得られた最も大きな成果は、子どもたちが地域課題を「自分とは関係のないもの」としてではなく、「自分たちが関わり、考え、形にできるもの」として捉えられるようになったことである。商品開発やサバニの活動において、子どもたちは地域資源を活用し、他者と協働しながら、具体的な成果物や提案を生み出した。こうした経験は、知識の習得にとどまらず、主体性、協働性、表現力、責任感、やり抜く力を育てることにつながった。

特に、第10回食育活動表彰における農林水産大臣賞受賞と、RESAS チャレンジカップ2025におけるアイデア賞受賞は、さくら教室の活動が地域内の実践にとどまらず、広く社会的に高く評価されたことを示す成果である。前者は、地域資源を活用した商品開発を通して、食育、環境、福祉、地域支援を統合した実践が国の最高賞として認められた成果であり、後者は、伝統文化を地域課題解決型の学びへ転換し、独創的かつ地域性に富む提案として評価された成果である。両受賞を通して、さくら教室が「支援を行う場」であるだけでなく、「社会に通用する学びを生み出す場」であることが明確となった。

また、地域の大人、企業、大学、行政等との連携が一層強化されたことも大きな成果である。子どもたちは、多様な立場の人々と関わる中で、地域社会が多くの支えによって成り立っていることを学び、自分たちもその一員であることを実感した。受け身ではなく、商品開発や発信、文化継承の担い手として活動した経験は、自己肯定感や社会参加意識を高めるうえで大きな意味を持った。

一方で、反省点としては、活動の広がりに伴い、運営体制の整備、人材確保、記録方法の整理、成果の可視化といった課題が明確になったことである。魅力ある実践であるほど、関係者個々の熱意や負担に依存しやすい側面があるため、今後は継続可能な組織体制、役割分担、評価指標の整備が必要である。また、受賞という大きな成果を一過性のものにせず、次年度以降の活動へどのように継承し、広げていくかも重要な課題である。

今後は、黄金もち麺・黄金素麺の取り組みをさらに発展させ、食育、地産地消、環境教育、販売体験、地域発信を総合化した継続的プログラムへと高めていきたい。また、サバニの取り組みについても、文化継承に加え、観光、交流、地域学習、地域ブランドづくりと連動した学びへと広げていくことができる。さらに、クラフトペーパー作りやバーチャル空間の活用も含め、地域資源、文化、環境、ICT を横断する包摂的な学びの場として、第三の居場所の可能性を一層広げていきたい。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

本活動の中で印象的であったのは、当初は自信を持てず、自分の意見を表に出すことが少なかった子どもたちが、活動を重ねる中で、自ら考え、発言し、役割を担うようになっていったことである。商品開発では、「どうすれば地域のよさが伝わるか」「なぜこの商品が必要なのか」と真剣に考える姿が見られた。サバニの活動では、自分たちが関わった作業や表現が実際の形として現れることに喜びを感じ、完成した成果を前に誇らしげな表情を見せる子どもたちの姿があった。こうした場面は、体験的な学びが子どもたちの自信と成長に直結していることを強く感じさせるものであった。

また、受賞の知らせを受けた際には、子どもたちだけでなく、地域住民、企業、大学関係者、支援者にとっても大きな喜びとなった。農林水産大臣賞（最高賞）受賞は、食育を通して地域課題解決と子どもの学びを結びつけた実践が、国レベルで高く認められたことを意味している。RESAS チャレンジカップ2025アイデア賞受賞は、地域文化の価値を未来志向で捉え直し、地域活性化の提案へと高めた実践が評価されたことを意味している。これら二つの受賞は、日々の地道な取り組みが社会の中で確かな価値を持つことを示し、活動に関わるすべての人にとって大きな励みとなった。

さくら教室は、食事や学習を支える場であると同時に、子どもたちが人と出会い、地域とつながり、自らの可能性に気づく場である。本年度の二つの受賞は、そのことを社会的に明確に示す成果であった。今後も、子どもたちの「やってみたい」という思いを大切にしながら、地域資源を学びへと転換し、学びを地域支援と未来づくりへつなげる第三の居場所として、実践をさらに深化させていく所存である。